

論文の和文要旨

論文題目 漱石とドストエフスキーにおける近代文明批判

氏名 チャラコヴァ・マリア

本論の目的は、大きく分けて三点ある。一点目は、漱石自筆の資料を分析し、森田草平の証言を再検討することで、漱石とドストエフスキーの関係を時系列に沿って捉えなおすことである。二つ目はドストエフスキーと漱石が生きた時代の歴史的な背景・社会情勢を考慮に入れながら、自国の近代化と土着の文化に対する眼差しや問題意識がどのように両作家の文学作品に反映され、共通した主題や心理的構造を生み出したのかを解明し、彼らの文学により多角的な解釈を加えることである。そして三つ目は、漱石がドストエフスキーを読んだ後に書かれ、ドストエフスキーのことも直接言及されている『明暗』におけるドストエフスキーの影響の有無を検討することである。

夏目漱石とドストエフスキーに関する従来の研究では、漱石におけるドストエフスキー受容についての考察がその大半を占めていた。と同時に、漱石が修善寺の大患までドストエフスキーに対して批判的であったという見方も定着していた。しかしそういった漱石のドストエフスキー観に対する理解は弟子森田草平の回想から生まれた誤解に基づいたものであると考えられる。漱石におけるドストエフスキー受容に関しても、確かに両作家の文学内実において類似性がみられ、晩年の漱石文学、とりわけ未完となった『明暗』におけるドストエフスキーの影響についてはまだ十分に明らかにされていないものの、両作家の文学作品全般にみられる問題意識とその文学的表現の共通性は、これまで論じられてきたような影響関係と区別する必要があると思われる。比較文学の研究において、19 世紀後半のロシアではすでに、世界文学における主題やプロットなどの類似性を一直線の影響関係によるものではなく、共通する歴史的な過程や社会現象によって生まれた、「心理的なプロセスの一体性」の文学的な表現として捉える試みがなされていた。漱石はドストエフスキーより 46 年後に生まれ、さらに約 60 年後に創作活動を始めたために、漱石がドストエフスキーの影響を受けているという考え方が当たり前のように定着していたが、両作家の文学作品にみられる主題性や人間関係の特徴の類似性はむしろ似たような感受性と問題意識で彼らが生きた時代を観察し表現した結果と考えた方が妥当ではないか、というのが本論の前提であ

る。本論の構成は以下の通りである。

第1章では、ロシアと日本の欧化のプロセスを考慮し、「周辺文明」として遅れて近代化を始めた両国においてそれが皮相的な性格を帯びていたこと、ロシアは日本より200年も先に欧化政策を開始したにもかかわらず、両国ともある種の圧迫感と焦燥感を与えるものであったことが確認できた。さらに、両国とも、出発点こそ違えども帝国主義の道を選び領土を拡大していったが、物質主義的な傾向も強まり、格差社会が広がっていった。これに対し、大きな相違点としては両国における教育に対する考え方と政府の方針があった。そのような時代背景こそがドストエフスキーと漱石の作品に影を落とすこととなったといえる。

第2章では、漱石が森田草平の提供したガーネット訳の『白痴』を読んで、「これは皆有り得べからざる程度に誇張したものだ、誇張以外の何物でもない」と酷評したのは、ドストエフスキー自身よりもドストエフスキー文学が異常な事件に支えられていると主張していた森田に向けられたものであった可能性が高いことが解明できた。日記にみられるドストエフスキーとニーチェの比較や、『明暗』における小林の人物像を考慮に入れて考えると、ドストエフスキーに対する漱石の理解は極めて深かったことがわかる。さらに、漱石がドストエフスキーの小説そのものを「讀破」した時期としては亡くなる一年前、1915（大正4）年11月から、少なくとも1916（大正5）年3月半ばまでの間である蓋然性が高いため、それ以前の漱石文学におけるドストエフスキーの直線的な影響の可能性は排除できることを指摘した。

第3章では、ドストエフスキーと漱石に共通してみられる青年との強い繋がり、それから両作家の文学における青春のテーマの重要性を明らかにしたうえで、ドストエフスキー『未成年』と漱石『三四郎』を取り上げ、ペテルブルグと東京に上京したアルカージイと三四郎に託された近代化の道を歩むロシアと日本のアレゴリーの類似性や、青年を主人公にする点において両国の文明開化の段階が現れていることが検証できた。また、『未成年』と『三四郎』における〈父の不在〉や〈父との不和〉というモチーフをドストエフスキーやチャアダーエフ、漱石の評論などとも照らし合わせて分析した。両作家の作品に共通してみられる〈父の不在〉や〈父との不和〉は、近代化を邁進しようと土着の思想や生活様式を全面的に西洋文明のモデルと置き換えたロシアと日本の若い世代の分裂した意識、ひいては近代ロシアと日本そのものにおける過去との連続の欠如のアレゴリーであると論じた。ただし、相違点として一つ挙げることができるのはペテルブルグと東京のイメージの違いである。三四郎にとって「現実世界」である東京とは対照的に、アルカージイの眼に映るペテルブルグは時として「だれかの夢」のようなものであるが、その背景にはピョートル一世の一

存によって実現された人工都市としてのペテルブルグの歴史があると考えられる。

最後に、『野分』における「自分で不愉快の眼鏡を掛けて世の中を見て」、「見られる」側まで「不愉快に」する高柳周作の人物像とドストエフスキー『地下生活者の手記』における「地下生活者」や『罪と罰』におけるラスコーリニコフと比較した。彼らの特徴づける下級社会に属する者としての社会的な苦悩と自意識過剰といった点において大きな類似性があり、高柳周作はおそらく漱石文学においてはじめて現れたドストエフスキー的な登場人物であると論じた。それは漱石によって「ペスト」と表現される「拘泥」し過ぎる人物である。しかし、ここで「ドストエフスキー的」というのは、ドストエフスキーの作品が先行したためにいうものであって、必ずしも影響関係を指すものではない。

第4章では、人間関係が錯綜し合う三（四）角関係がプロットの軸となっているドストエフスキー『白痴』と漱石『こころ』における近似性を考察した。金力と権力の強い関係性や命を奪う支配欲が一層浮き彫りになる『白痴』と『こころ』はともに、社会のみならず個々の価値観が試される大変動の時代における恋愛問題を一つの事例として功利主義を手握った人間の精神的墮落を仄めかしている点で酷似しているといえる。そのような人間関係の歪みによって浮かび上がってくる自国の行方を案じるドストエフスキーと漱石の痛烈な問題意識が認められると同時に、次第に展開されていく悲劇を直接目撃する『白痴』のコーリャや、そのいきさつのルポルタージュともいうべき先生の「遺書」を受け取る「私」に体现される若い世代に込められた両作家の強い希望が窺える。大きな相違点としては、ナスタシャやアグラヤと対照的に描かれている御嬢さんの存在が挙げられるが、静という彼女の名前から想像される御嬢さんの消極的な振る舞いによって、彼女への愛よりも自己満足を満たすための欲望と独占欲に動かされている先生に表象される功利主義および帝国主義の問題にフォーカスが置かれていることが示されていることを指摘した。

第5章では、ドストエフスキー『罪と罰』と漱石『それから』における「頭脳の男」たちラスコーリニコフと代助が論理に支配され、それを行動に移すことで自らの人生だけでなく、他者の人生の軌道まで外してしまうという、ストーリーの展開にみられる共通性について考察した。貧しい元大学生ラスコーリニコフと実業家の息子である代助は違う階級に属する人物ではあるが、「働かない」ということを通して生きる社会の有り様へ抵抗していること、また、前者は「非凡人」論のために思想殺人を犯した自分を、後者は「名誉」のイデオラのために互いに思いを寄せ合っていた相手を捨てた自分を振り返ってみてはじめて自らの知能に過信していたことを思い知らせる過程が酷似していることを論証した。二人の「新生活」への道のりも重なり合う。ラスコーリニコフは二つの命を奪ったことを自白し、流刑

地に流される一方で、代助は人妻となった三千代に 3 年前の過失と自らの愛を告白し、父に勧められている縁談を断り、三千代との関係を発展させることを選ぶことで、姦通を犯し、社会ののけ者となる道を選ぶ。このように二人の青年は何らかの形での罪と自己破壊を通して観念世界を出て、現実世界へと足を踏み入れることになるが、その「新生活」を支えるソーニャと三千代の存在と役割もまた非常に似通っていることが確認できた。

最後に、漱石とドストエフスキーを考えるうえで避けることができない問題として『明暗』を取り上げ、小林の人物像とドストエフスキーの道化たちマルメラードフやレーベジエフとの類似性、それから彼の存在によって生み出されるポリフォニー効果や、漱石のどの作品よりも複雑に絡み合う人間関係にみられるカーニバル性といったドストエフスキー的な要素を解明した。『明暗』に着手する前に漱石がドストエフスキーを読んでいたこと、津田とお延をめぐる登場人物との交流と対話におけるカーニバル性がみられること、そして「わざわざ人の厭がるやうな事を云つたり爲したりする」小林が漱石文学において初めて現れるタイプのキャラクターであることを考慮に入れて考えると、漱石がドストエフスキーから示唆を受けていた可能性は許容すべきであろう。しかしながら、たとえば『明暗』における鞭を加えられている痩せ馬のエピソードは一見『罪と罰』におけるラスコーリニコフの「おそろしい夢」へのオマージュともとれるが、漱石自身の奉天での実体験によって生まれた場面である可能性もあることから、『明暗』に関しても、ドストエフスキーとの類似性がすべて影響関係によるものとは限らないことを指摘した。

本論が明らかにしたのはドストエフスキーと漱石の文学に共通してみられる登場人物の心理や人間関係の動きに垣間見る社会の歪みそのものは二人が生きた時代の産物であり、彼らの鋭い観察力の証でもあること、また二人の文学作品を単なる影響関係を越えた観点から読み直すことによって、時として一人一人の登場人物、時としてその作品全体に込められたメッセージ性が一層明瞭に、一層総合的に浮かび上がって、新しい発見も生まれるということである。また、両作家の文学世界に共通してみられる理想や大儀の欠如、功利主義の行き過ぎに内在する危険性、観念にとらわれ、実生活における他者との関係性を失ってしまった時の困難さや罪との繋がりなど、様々な形で表現された近（現）代社会の暗部だけでなく、同時にその多くの問題の特効薬として人と人を繋ぐ共感の役割が強調されており、それこそが『白痴』や『罪と罰』、『野分』や『こころ』のみならず、『明暗』にも通底しているテーマの一つであるといえる。このようなドストエフスキーと漱石の世界観は、しばしば指摘される両作家のスピリチュアルな土台の違いを遥かに超越しており、統一概念としての共感の大切さは依然有効性を失わないであろう。